政治的社会化（I）

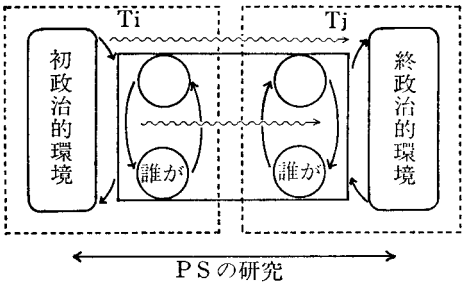
——PS研究の為の分類表——

高橋和宏

一定社会の人々がいかにして、政治に対する考え方や態度を身につけ政治的行動や状況の中に組入れられ、又そこで新たな状況を造出していくか、という問題に応えんとするものの一つに政治的社会化（Political Socialization, 以下PS）の研究がある。抑々この問題は、古典的には、政治における理想的市民の教育や社会契約が結ばれ或いは一般意志が形成される過程に関する問題として、又権力的には、一定の体制及びその諸価値の受容と適応やその代替物の拒否の促進による、支配的と対抗的との両権力からの大衆教化に関する問題として考えられるが、ここにおいては、ミクロ的にいかして政治的学習がなされ、マクロ的にいかしてその結果が政治的意味を示していくかという問題として扱われている。[1] この研究は政治行動の説明に幅の広い有効性をもち、特に投票行動の予測を可能ならしめるものと目されている。[2] かかる研究の実証結果が近年 H. Hyman にまとめられて以来アメリカには数多くの業績が手頃な指針のないままに蓄えられている。そこで本稿の課題は、PS研究における実証的研究結果の幾つかをその分析視角についての分類の為の枠組を用意しそれに従い整理することにより、暗に含まれていた問題点を顕在化させ、相互の多面的な比較を可能にし、一見異なった分析も実は同一視点に立つものであることなども指摘しつつ、今後の研究が恣意的な枠組に委ねられることの弊を避けんとすることにある。

PSのかかる研究結果の整理の枠組を探る前に、PS研究の外延の確定化としてPS概念の包括的な定義を試みておく。PSは「社会の様々の担い手を通して伝達される、社会的位置に応じた政治的に適合の社会的型式の学習」[3]であり「人々が行動についての政治的な志向と型式を習得するその発達的過程」[4]であるからそれは、ある政治的環境についてその担い手との交互作用を通し発達的に学習することと云える。又PSは、「現行の政治体系に受容され実行されている規範、態度、行動の漸進的な学習」[5]であり「二次的社会化の担い手が過去とは異なった政治的な価値を教え込んだ時或いは子供が彼らの祖先とは違った政治的社会的期待をもって養育された時には、政治的社会的変動の一種の媒介物となり得る」[6]という把握から、政治的環境に対する、初期的に与えられたものと終期的に造られるものとの二つの見方が引出し得る。従ってPSは政治的予備人口が、ある時点で所与的な政治的環境についてその担い手との交互作用を通して発達的に学習し、政治的人口となった時点でその政治的環境を変容させていく過程と定義し得る。[7] かかる包括的なPSの過程を、政治に関する環境とパーソナリティとのフィードバック的交互

図1



規定関係の中で図式的に理解するならば、図1になる。[8]

次に整理の為の枠組の骨子を用意する目的で、検討されるべきPS概念の構成要件として「PSの結果、それが行われる過程、それを行う担い手やその社会的場[9]」とか「社会化の対象としての個々人、社会的の媒介的作用をする担い手、学習されるべき政治的な行動の様式や認知や態度、これから三者間の交互作用的習得過程[10]、又「誰が、何を、誰から、どんな状況で学び、どんな結果に[11]」などが考えられる。そこで誰が、誰（何）から、何を、と交互的習得過程及びその結果とがPS概念の構成要件として要約される。従って、外延の確定化に伴って提起された二期点での政治的環境と、前三者との五つを骨子とし、それらの各々や組合せたものに従い後二者を分類することによって、かかる分析視点からの整理とする。即この分類によりその研究結果が、五つの骨子のうち就中どれ或いはどれとどれにより焦点が当てられて分析され、どのような交互的習得過程及びその結果を得ているかが明らかにされる。更に発達的視点からその分析が通時点的なものか一時点的なものかも考慮して分類していく。

「誰が」とはPSの対象としての個々人の社会的心理的属性（文化・宗教・居住地・世代・性・階層・パーソナリティ等等）やその間の関係を、「誰・何から」とは家族・仲間・学校・マスメディア等々のPSの担い手の社会的心理的属性やそれらの間の関係を意味する。「何を」とはPSで習得される政治・社会的内容と、そのある水準[12]での意識の諸側面における位置やそれらの間の関係を含む（表2）。

表1　分類表

一時点 ＼ 通時点	誰が 1	誰何から	何を 3	終期的
誰が 1	B11 ＼ A11	B12	B13	Tj 1
誰何から 2	A12	B22 ＼ A22	B23	Tj 2
何を 3	A13	A23	B33 ＼ A33	Tj 3
初政治的環境	Ti 1	Ti 2	Ti 3	含まない

政治的学習の始まる時期、その重大な展開の時期やそのほぼ安定の時期を巡っての二極的な幾つかの見解がある。一方「八学年（一三歳）までに、子供の四割より政党間の論争点の相違を述べることができず半分以上が全くできない程、とても不十分な発達の状態である[13]」し「正に高校時代で諸変化が生じている。これらは主に政党間の相違に関する認知的能力の分野と考えられる[14]」。「高校二年から大学二年にかけては保守―革新を軸

とする知識が増し革新化の傾向が強まる」[15]と見ることができ、又「参加の始まりは相対的に初期の子供の年代に求められなければならぬが一七歳から二一歳までその高まりは小さいが増大している」[16]と。他方「若者についての現存の研究はその主要な焦点を高校時代（一四―一七歳）に置いているが、子供の政治的世界は正に小学校に入学する十分以前に形成され始め小学校時代（六―一三歳）に最も急激な変化を経験する。二学年になると殆どが共同体に愛着を示すようになり又多くが政党同一視をはっきり言える」[17]。又「一五歳までに形式的思考がほぼ完成し共同体の全体的理解が可能になり、この段階から一八歳にかけての変化はそれ以前の変化に比べてよりゆるやかなものになる」[18]と。ところがこれらの主張は、対立点をまず「何を」に関して整理すればむしろ補完的関係にあることが分かるから、A 33 に一括して分類される。この問題は分類表から更にその多面的な分析の可能性が期待される。例えば「誰が」に焦点をあて「金持（貧乏）→資本家（労働者）→保守政党（革新政党）→資本主義（共産主義）の各系列で進められる対立的関係認知

表 2 「何を」

国県 地方[1]	政府 In	政府 Out	政治体制	政治体制	共同体	共同体	共同体	主体の政治構え PIn	主体の政治構え PE	主体の政治構え PE
認知										
感情										
評価										

の発達に関して、中学生よりも勤労青年が高いと云えるのは農村ではなく都市でである」[19]とするならば、これはA 11 に属すると考えておける。

錯綜する様々の政治論争に関心を示す以前の人生の初期の段階に、子供の政治的準拠枠、特に政治的権威に対する好意的な態度が形成されることは、政治体系の存続や安定の為に必要だと考えられている。これについて「二学年生の八六%、八学年生の五二%が大統領を一般の人より正直だと見る」[20]という結果を得ている。又「子供は政治的指導者に対してその具体的役割を知る以前にも成人より好意的であり、就中指導者を慈悲深いと見る点で成人と異なっており、成人の間に浸透している政治的シニシズムや不信感が八学年までの子供には見られない」[21]と結論されている。ところが「貧困なある田舎の子供は大統領に対してそれ程好意的ではなく、子供の高度に好意的な態度は文化に限定された現象である」[22]と述べられている。「日本の総理大臣像は要約すればとても金持でどちらかといえばうそつきで責任遂行についてはとりたてていう程のことはなく、自分にとってきらいな存在で人々からもあまり好かれていないようである」[23]とも推論されていることを考えると、この問題は「誰が」（B 11）によって整理する必要がある。ここで「何を」という視点を加えて政治的有効性感（Political Efficacy: PE）[24]もこの問題に含めその通時点的分析結果を見る。「PEは学年と共に高まり八学年生の八三%がその中以上の水準に達している」[25]けれども逆に「コロンビアの子供は学年と共にPEが低化し

市民の意見は政治に取入れられていないと考えるようになる」[26]ということが指摘されている。だからこの問題は一括してA13の分析視点に立ち整理、再考されるべきである。この問題に関してPSの担い手間の整合性のもつ影響に重点を置いた分析はまずB22から出発し一時点的整合性から通時点的整合性へ。

大衆における政治的指導者の形成過程を取上げると「政党活動員の政党同一視はアメリカの場合（一二歳前）よりカナダの場合（一五歳前）が遅く形成され変動が多い」[27]と云われ「イギリスの活動家の八割がラディカルな父親をもっており」[28]「政治的指導者への道を選ばすものはその階層、能力やパーソナリティ（劣等補償）などよりも子供の時の家族の影響や職場のそれによる」[29]と主張されている。これらはA12において比較検討できる。

政治意識の形成に関する社会化の担い手の研究の中で親子間を問題にするものは多い。「ジャマイカでは、親の子供への支配の厳格さの程度と親子間の政党同一視の一致の程度は直線的ではなく、中位に厳格だと一致はより低くなる」[30]が、「ベルギーやオランダでは、親の子供への支配の厳格さが子供の政治的不満と関連がある」[31]と指摘されている。又「宗教・職業・学歴・収入・居住地から成る生活様式の指標に関して親と一致の方向へ移動した子供の八四％以上が政党同一視でも一致しより安定した政党同一視を示す」[32]。「幼年期に父親との同一視に失敗すると権威主義的傾向を呈する」[33]と云われている。次に家族と学校や同輩集団との影響の相対的強さを比較すると「ジャマイカでは、PEに関して一般的には家族の方が強いがこのことは子供の出身階級別に見れば、上層の子供ではむしろ学校や同輩集団の方が強い」[34]ことが分かる。これらはB12で視点を絞って見た方がよい。B23に位置付けると検討し易い場合がある。即、対の親子間の関連は、「三〇年代以降に調査されたものの要約から政党同一視を除けば他は低いと云わざるを得ない」[35]し「高校時代の終りで、高いものは宗教と政党同一視だけであって論争問題も低く、むしろ今後はマスメディアが重大な担い手となるのではないか」[36]と考えられている。そして「より深く安定的とされている伝統的な或いはマキャベリ的な対人処理方法の親子間の関連は高いが革命に関する考え方では特に低い」[37]と述べられているように「誰・何から」及び「何を」の二つの分析視角から見ることができ、通時点的な資料を集めることができるならば更によい。

「プライマリーグループから与えられる情報が複数で、整合的な場合不整合な場合、単一で整合な場合の順に政党へ同一視している者が少なくなる」[38]という指摘や「PEに強い影響を与えると考えられている、パースペクティヴの狭さともいうべき、物象化思考（Reification）は人生の適切な段階にPSの担い手により除去されねば固着する」[39]という主張はA22に分類して以下の結論と一緒に検討してみることは有効だ。「イギリスでは、一一歳から一七歳までの政治的関心（Political Interest: PI）の発達的度合は性別・階級別及びそれらの交互作用によっ

てではなく学校別によって有意差が出る[39]」。つまり「誰が何を」を一定にしておくことも必要だと考えられる。

「誰が」による政治観の相違を分析したものを挙げると「カナダのフランス系の子供は政治を権威的に捉えその分配過程に注目するが、イギリス系では民主的で決定過程的でありこの差は学齢と共に開く[40]」という結果が見られる。「高校生での出身階級の差が、上層の場合は対立的な見方で参加も積極的であるが労働者の場合は逆という様に生じている[41]」けれども「成人での黒人と白人との相違は既に一〇代で階級差によらず、黒人がよりシニカルで政治化が高いという形となって表われている[42]」。それから「高校生の政党同一視は地方の社会的雰囲気や国のそれからの影響が各々見られる[43]」と云われている一方「高校生のそれは地方の次元ではあるが国の次元ではない[44]」と結論されている。これらに類似した分析も一まず B 11 に置くことにする。異なる世代の未成年者間の比較も意義がある。

政治的環境からとそれへの問題（Ti-, Tj-）は分類表に登場しなかったが、これはPSの研究と従来の政治的過程論との重要な学際的分野と考えられる。例えば家族の影響を重視した立場に立つか、それとも規定する社会構造にむしろ直接的な影響を見て取るかについての鋭い対立[45]や、政治に関する教科書内容の形成と変容過程の分析などはここに属する。

(1) R. E. Dawson et al., *Political Socialization*, Boston, 1969, pp. 6–14; D. Jaros, *Socialization to Politics*, London, 1973, pp. 9–24; R. Miliband, *The State in Capitalist Society*, 1969（田口訳『現代資本主義国家』、未来社、一九七〇年、二〇七—二〇八頁）。

(2) H. Hyman, *Political Socialization*, New York, 1959.

(3) L. A. Froman, Jr., "Personality and Political Socialization," *JP*, vol. 23, 1961, pp. 341—52.

(4) D. Easton et al., *Children in the Political System*, New York, 1969, p. 7.

(5) R. Sigel, "Assumptions about the Learning of Political Values, "*The Annals*, vol. 361, 1965, pp. 1—9.

(6) K. P. Langton, *Political Socialization*, New York, 1969, pp. 4—5.

(7) G. Bender, "Political Socialization and Political Change," *WPQ*, vol. 20, 1967, pp. 390—407 を参照。

(8) Froman, op. cit.; M. B. Smith, "A Map of the Analysis of Personality and Politics," *JSI*, vol. 24, 1968, pp. 15—278 を参照。

(9) R. E. Dawson, "Political Socialization," in J. A. Robinson ed., *Political Science Annual: An International Review*, vol, 1, 1966, p. 19.

(10) Langton, op. cit., p. 8.

(11) F. I. Greenstein, *Children and Politics*, New Haven, 1965, pp. 12—15.

(12) D. Easton et al., "The Child's Political World, "*MJPS*, vol. 6, 1962, pp. 227—46; D. Jack, "Major

Problems of Political Socialization Research," *MJPS*, vol. 12, 1968, pp. 85—115; G. A. Almond et al., *The Civic Culture: Part I*, Boston, 1963 を参照。

(13) Greenstein, op. cit., p. 71. 示されていないのはアメリカや日本での研究の要約。

(14) M. K. Jennings et al., "Patterns of Political Learning," *HER*, vol. 38, 1968, pp. 443—46.

(15) 広瀬弘忠「政治的社会化過程における〈政治的認識〉と〈政治的態度〉の関連」『心理学研究』，第四三巻第五号，一九七二年。二三八—二五〇頁。

(16) Hyman, op. cit., pp. 51—68.

(17) Easton, op. cit.,

(18) J. Adelson, et al., "Growth of Political Ideas in Adolescence: The Sense of Comunity," *JPSP*, vol, 4, 1966, pp. 295—306.

(19) 秋葉英則「青年の政治活動」『現代青年の社会参加』〔現代青年心理学講座6〕，金子書房，一九七二年，一〇七—一五五頁。

(20) R. D. Hess et al., "The Child's Changing Image of the President," *POQ*, vol. 24, pp. 632—45; 又 D. Easton, et al., "The Child's Image of Goverment," *The Annals*, vol. 361, 1965, pp. 40—57 を参照。

(21) F. I. Greenstein, "The Benebolent Leader: Children's Images of Political Authority," *APSR*, vol. 54, 1960, 934—44; id., "More on Children's Images of the President," *POQ*, vol. 24, 1960, pp. 648—54.

(22) D. Jaros. et al., "The Malevolent Leade r.: Political Socialization in an Ame rican Sub-Culture," *APSR*, Vol. 62, 1968, pp. 564—78.

(23) 岡村忠夫「現代日本における政治的社会化—政治意識の培養と政治家像」『年報政治学』，岩波書店，一九七〇年，一—六七頁。

(24) A. Campbell et al., *The Voter Decides*, Westport, 1954, p. 187 を参照。

(25) D. Easton et al., "The Child's Acquisition of Regime Norms: Political Efficacy," *APSR*, vol. 61, 1967, pp. 25—38.

(26) R. Reading, "Politica Socialization in Colombia and the United States: An Exploratory Study," *MJPS*, vol. 12, 1968, pp. 352—81.

(27) A. Kornberg et al., "Some Differences in the Political Socialization Patterns of Canadian and American Party Officials: A Preliminary Report," *CJPS*, vol. 2, 1969, pp. 64—88.

(28) P. Abrams et al., "The Young Activist in British Politics," *BJS*, vol. 16, 1965, pp. 315—33.

(29) K. Prewitt, "Political Socialization and Leadership Selection," *The Annals*, vol. 361, 1965, pp. 96—111.

(30) Langton, op. cit., pp.23—30.

(31) F. A. Pinner, "Parental Overprotection and Political Distrust, "*The Annals*, vol. 361, 1965, pp. 58—70.

(32) H. McClosky et al., "Primary Group Influence on Party Loyalty, "*APSR*, vol. 53, 1959, pp. 757—76.

(33) R. E. Lane, "Fathers and Son's Foundations of Political Belief," *ASR*, vol. 24, pp. 502—11.

(34) Langton, op. cit., pp. 140—60.

(35) R. W. Connell, "Political Socialization in The American Family: The Evidence Re-Examined," *POQ*, vol. 36, 1972, pp. 323—33.

(36) M. K. Jennings. et al., "The Transmission of Political Values from Parent to Child," *APSR*, vol. 62, 1968, pp. 169—84.

(37) L. N. Friedman et al., "Dissecting the Generational and Intrafamilial Similarities and Differences," *POQ*, vol. 36, 197 2, pp. 334—46.

(38) R. M. Merelman, "Intimate Environments and Political Behavior, "*MJPS*, vol. 12, 1968, pp. 382—400; 及び id., "The Development of Political Ideology; A Frame work for the Analysis of Political Socialization," *APSR*, vol. 63, 1969, pp. 750—67; H. Gabennesch, "Authoritarianism as World View," AJS, vol. 77, 1972, pp. 857—75 を参照。

(39) R. E. Dowse et al., "Girls, Boys and Politics," *BJS*, Vol. 22, 1971, pp. 53—67.

(40) J. P. Richert, "Political Socialization in Quebec: Young People's Attitudes toward Government," *CJPS*, vol. 6, 1973, pp. 303—13.

(41) E. Litt, "Civic Education, Community norms and Political Indoctrination," *ASR*, vol. 28, 1963, pp. 69—75.

(42) A. M. Qrum et al., "The Development of political Orientations among Black and White Children," *ASR*, vol. 38, 1973, pp. 62—74.

(43) M. L. Levin, "Social Climates and Political Socialization," *POQ*, vol. 25, 1961, pp. 596—606.

(44) N. R. Johnson, "Political Climates and Party Choice of High School Youth," *POQ*, vol. 36, 1972, pp. 48—55.

(45) P. E. Converse et al., "Politicization of the Electorate in France and the United States," *POQ*, vol. 26, 1962, pp. 1—23; F. I. Greenstein et al., "The Study of French Political Socialization toward the Revocation of Paradox," *WP*, vol. 22, 1969, pp. 95—137; D. R. Cameron, "Stability and Change in Patterns of French Partisanship," *POQ*, vol. 36, 1972, pp. 19—30; Cameron et al., "Non-Family Agents of Political So-

cialization: A Reassessment of Converse and Dupeux," *CJPS*, vol. 5, pp. 418—32.

(一橋大学大学院博士課程)